

## 森吉山麓高原自然再生協議会 小委員会議事録概要

日 時：平成22年7月28日（水） 14：00～15：30

場 所：秋田地方総合庁舎 5階 第10会議室

出席者：和田委員長、星崎委員、福森委員、村田委員

### 【小委員会における協議事項概要】

- 補植については、生存率の低い2カ所について実施する。併せて、ノウサギの食害に対する忌避の試験も検討する。下刈りについては、植栽木が被圧されているような区画に限って、最低限の下刈りを来年度から検討する。
- 平成22年度植栽箇所については、事務局原案通りとする
- 次期実施計画については、これまでの取組をトピックスとして織り込むとともに、自然環境学習などの部分を拡充することとし、引き続き委員から意見を集約しながら計画策定を進めること。

### 【協議での意見概要】

#### （1）これまでの植栽地の状況と補植について

委 員) 植栽地の一覧に、同じ番号があるのでわかりにくい。

事務局) 植栽事業を発注した際の成果品の番号を便宜的にそのまま使用しているので、今後整理していきたい。

委 員) 生存率の低い区画について、ブナ以外の樹種は入ってきているか。

事務局) ブナ以外の樹種はない状況。28-4については斜面下部にカヤ類があるぐらい。

委 員) 森林の連続性という観点からは、島がそれなりにつながっていくようであればあえて今補植をする必要性は乏しいかもしれない。

委 員) 補植した結果、森林がつながっていくようにしなければならない。

委 員) 補植の密度をどうするかということは考えているか。

事務局) 補植については事業発注の請負差額分で実施する予定で、本数として400本弱を考えている。

28-4については、壊滅状態なので大苗を植えるなどの工夫が必要。

委員長) 8-3と28-4については山取苗だったものを、センター苗で補植して様子をみるということではどうか。

委 員) 山取苗と森林技術センターの苗では生存率がかなり違うが、山取苗が悪かったのか、土壌条件が悪かったのかという判断はいかがか。

委員長) 難しい部分である。

委 員) いずれにしても手当しながら植えていく必要があると思う。

委 員) 生存率の悪い箇所以外に、補植を行った方がよいのではないか。

委員長) 当初に植えた場所も生存率が悪い箇所があるが、森林技術センターでモニタリングを実施しているため、補植するとデータが煩雑となるので避けたい。ただ、

生存している個体については生長がよくなってきている。

振興局) 調査した際に、植栽地に草が生えていないためノウサギ被害があるように感じた。また、区画の四隅に木杭が打ってある周辺では食害が少ないような感じがしたので、そういった人為的なもので被害対策も考えられるのではないか。

委員長) 下草、つまりウサギの食べるものがないと食害も多くなるので、潔癖な下刈りはよくない。ウサギの害はどこでも発生するが、2～3年たてば被害は薄れて、森林としては成立していくケースが多い。

事務局) ウサギの害については残っている森林との位置関係も関係があると考えている。

委員) 白神山地でもなにか対策をやっていたと思うが。

委員長) 忌避剤などの手だてはあることにはある。

委員) 28-4については、ウサギやネズミの害を考えて、低コストで食害を避けるような実験を行えばよいのではないか。

委員) ボランティアで植栽した場所の下刈りは行っているが、これは植えた子供達がまた見に来たときにわかりやすいようとの理由で行っている。そのすぐ隣には10年ほどたったブナがあり立派に生長している。そちらは下刈りをしていないので、下刈りの必要性についてはどうなのかなという気がする。

委員長) 下刈りをするならば、葉に光が当たる程度の粗めの下刈りで十分である。

委員) 笹に被圧されていると話は違うが、草であれば、春先は樹木の葉が開くのが早いのでその時点で十分光合成はできているはず。そうして70～80センチの大きさに育てば十分といえる。

委員) H18年度植栽地のように被圧されている箇所は下刈りしたほうがいい。特に、ススキが入っている場所はしなければならないと歩網。

委員) ススキは秋に枯れて倒伏するが、苗木と一緒に倒される。そうになると春になかなか起きあがれない状況になる。

委員) いままでの意見はいずれも経験則のみなので、実証を行った方がよい。

## 《まとめ》

補植は28-4, 8-3で実施。28-4についてはノウサギ被害対策の実証を織り交ぜる。下刈りについては、来年度以降、現在被圧されているような場所を対象に検討する。

## (2) 平成22年度植栽箇所について

(特に意見なし)

## (3) 次期実施計画について

委員長) 次期実施計画には、これまで実施してきた取組み、たとえばボランティアの植栽状況やモニタリングの結果などをトピックス的に入れ込んだ方がよい。

また、第5章の自然観察・自然環境学習についてはもっともっと拡充した方がよいと思うが、たとえば、現地にある施設を活用するといったことを明文できないか。

事務局) 第5章については拡充するつもりではあるが、具体的な内容まではまとまっていない状況である。また、青少年野外活動基地の指定管理の期間が今年で終わり、来年から新たな指定管理者となる可能性があるので、その動向を見極めながら織り込んでいく必要がある。

委員) 野外活動センターの裏手のブナ林は、将来的には子供達の体験の場として整備していければよいと思う。植樹は大人達が一生懸命やっているとしても、そうしたことを子供達に伝えていくことが大切。

委員) 次期実施計画は、期間はどのぐらいになるか。

事務局) 上位計画の自然環境整備計画と連動するので5年計画となる見込み。

委員長) いずれにしてもソフト面の部分を拡充していく必要がある。

今日は意見を思いつかなくても、引き続き、随時意見を事務局まで出すことにして次期計画の策定を進めてもらいたい。